

講義年月日 2006年10月16日

講演者 加藤 好郎 氏 (慶應義塾大学国際センター事務長)

テーマ 大学図書館における電子媒体の充実とコンソーシアムについて

講義内容

1. はじめに

- ・コンソーシアムのライフサイクルについて導入期・成長期・成熟期があることを2003年シャカフ(ノースカロライナのライブラリサイエンスの教員)により論文が発表された。
- ・図書館資料として電子媒体資料は利用者のニーズが高まっているが、コンソーシアムを組まなければ、電子媒体資料の充実と発展は難しい。コンソーシアムの形態をとれば可能である。
- ・企業におけるマーケティング分析を行い、コンソーシアムのライフサイクルを検証する。

2. 図書館を企業に置き換え、企業と図書館との比較(営利と非営利)をする

- ・マーケティングの必要性

	企業	図書館
Concept	販売	サービスと信頼の交換
Target	消費者	利用者
Strategy	競争	協力
Marketing	商品、価格、場所、販売促進	サービス、検索時間の節約、快適な環境、コミュニケーション

3. マーケティング戦略

- ・ブランド競争 同じ消費者・利用者をターゲットにした競争と協力
例：トヨタとホンダ
早稲田と慶應義塾大学 オックスフォードとケンブリッジ大学など
- ・産業競争 同一商品・サービスをターゲットにした国際的な競争と協力
例：トヨタとホンダとBMW
RLGと慶應義塾大学(RLGは7月OCLCに吸収された)
- ・形態競争 同一種類の競争と協力
例：ペットボトル業者と葉茶屋 大学図書館と公共図書館
- ・一般競争 異業種間の競争と協力
例：あらゆる商品間の競争 大学図書館と法人、自治体との連携、

4. ブランド・リサーチ

- ・企業では日本経済新聞などにより企業の人気度を測っている。図書館ではアンケートをする。特徴のあるサービス、コレクションの評価など口コミで人気度を上げる。企業ではマイクロソフト・キャノンなど人気あり。
- ・存在意義について問う
この企業は必要であるかどうか、良い商品であるかどうか、仕事は有益であるかどうか、働き甲斐があるかどうか。図書館では、ユーザーにとり存在価値があるかどうか、館員は意欲が持てるかどうか。

5. 商品の受入サイクル

- ・導入、成長、成熟、衰退期があり、成長期には新しい商品を育てなければならない。

日本の図書館では、

初期発展期	Google, e-book, digitalization
発展期	E-journal, OPAC
成熟期	ILL, 開架書庫
衰退期	目録カード、冊子体

6. Potterのコンソーシアムを組むための6基準

- (1) 参加館はどのくらいか
- (2) 何を狙っているのか
- (3) 設立理由
- (4) 財源
- (5) 大きな大学がどのくらい参加しているか
- (6) 管理運営組織はどこなのか

7. コンソーシアムを組むための実例

- ・イギリス (JISC DNER/NESLI) 1996年 175大学参加
- ・スペイン (REBLUN) 1996年 47大学参加
- ・イスラエル (MALMAD) 1998年 8大学参加
- ・オーストラリア (CAUL CEIRC) 1998年 39大学参加
- ・中国 (CALIS) 1998年 70大学参加
- ・イタリア (INFER) 1989年 15大学参加
- ・ミクロナシア (FSM) 1999年 この国の全ての図書館
- ・ブラジル (ANSF) 2000年 6大学参加

8. ライフサイクルのそれぞれの段階

- 萌芽期 (1) 準備段階、初期の段階
ボランティア的なネットワーク、政府・官公庁から予算を取る、
コンソーシアムのリーダーを創る
- 初期発展期 (1) 実った成果を確認
(2) 書誌ネットワーク・相互貸借
(3) 電子資料の共同購入
(4) コンソーシアムの特徴の確立
(5) 他のコンソーシアムとの連携関係が始まる
- 発展期 (1) 外部資金の確保
(2) 参加館の意義
(3) 参加館で共有する資料の充実
(4) 発展期は5年間で完成させる
(5) 有効性と効率性の追求
- 成熟期 (1) 相互目録・貸借、電子資料へのアクセスの確保
(2) インターネット接続の支援・提供
(3) 大学図書館以外の参加
(4) 参加料により財政的に独立した組織を確立する
(5) 電子情報資源のための重要な交渉の役割を担う
(6) 他のコンソーシアムとの協力により新たなサービスを展開させる
- ・ 今までの実績では実行力不足のためコンソーシアムが解散するか、終結するか判らないが、目的の達成の途中で追及する必要はない。
 - ・ 成長して行くコンソーシアムは新たなコンソーシアムが創設される。

9. それぞれの国の発展段階について

萌芽期	イタリア、ミクロネシア、スペイン
初期発展期	ブラジル
発展期	中国、イスラエル、イギリス
成熟期	オーストラリア、アメリカ
最終段階	カナダ
メタコンソーシアム	ICOLC、EIFL

10. 日本の大学図書館コンソーシアム

萌芽期 (1998-2000)

- ・ イントラ型電子ジャーナルの共同利用、国立大学図書館6大学によるIDEALコンソーシアム。2002年に解散。

初期発展期（2000-2002）

- ・ 国立大学の提携による電子ジャーナルのためのタスクホース
- ・ 東京大学が主要な役割を担う
- ・ 2002年、エルゼビア他4社とのコンソーシアム契約が成立

発展期（2002-2003）

- ・ 電子ジャーナル13社と契約増加
- ・ 3,800タイトル利用可能
- ・ 文部科学省が国立大学に予算計上
- ・ NIIとの協同により永続的なアクセス保証が可能
- ・ 私立大学コンソーシアム（PULC）の設立
PULCは5大学からスタートし、現在85大学が参加している
- ・ 私立大学の電子ジャーナル購入に対して補助金がついた
- ・ 自立的組織への脱皮
- ・ JCOLC(Japan Coalition of Library Consortia)の設立計画

11. おわりに

- ・ 日本のコンソーシアムの現状は電子ジャーナル購入が主な目的となっている。電子ブックについても同様の戦略が必要である。
- ・ シャカフの方法論を発展させるためにはさらなる調査とデータの収集が必要である。
- ・ 日本の図書館の環境に適した斬新なコンソーシアムを設立することにより電子情報資源購入の増大を目指してゆく。
- ・ コンソーシアムライフサイクルを見直す時期に来ている。
- ・ 地域性、分野など検証し、自分の図書館の弱みと長所を知る
- ・ 日本は成熟期まではいかないが、e-bookもコンソーシアムを組みデータの充実を図る。